

就職支援室における相互行為分析

田中 文恵

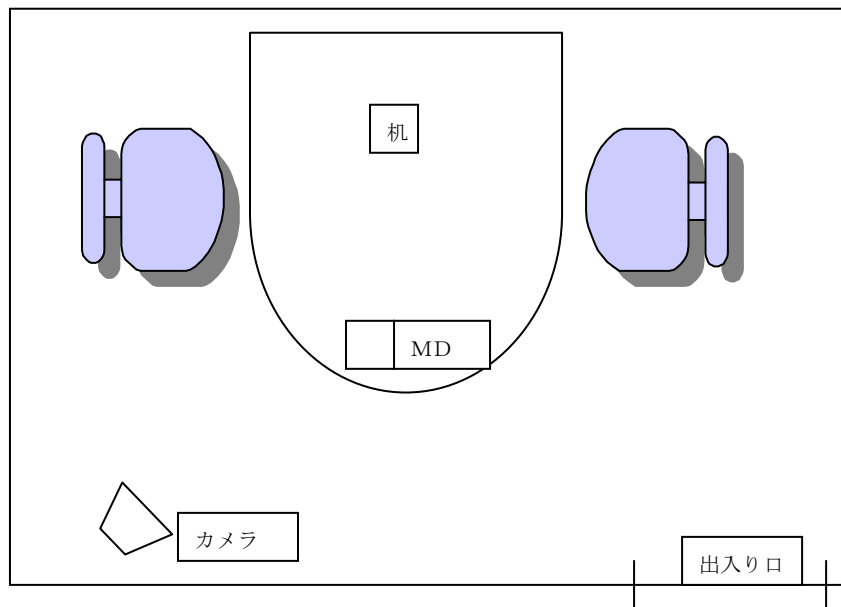
0. はじめに

本研究では、X大学（以下、施設等の名前は仮名とする）の就職支援室で行われている模擬面接・相談の様子を撮影し、より詳細な観察・分析を行うことで、就職の模擬面接・相談という場で面接官と相談者のどのような会話のやり取りがおきているのか見ていきたい。また、就職支援室の一画で行われている模擬面接や相談の中での面接官と相談者のやり取りや動作、視線がどのようにしてその場を模擬面接・相談の場として成り立たせているのかを分析・考察していく。

1. 調査概要

1-1. 調査の概要

2004年7月22日（木曜日）と2004年7月27日（火曜日）の二日間、X大学内の就職支援室で行われている模擬面接・相談の様子の撮影を行った。面接官として外部講師が来校し、火曜日には男性面接官が、木曜日には女性面接官が担当している。模擬面接・相談は、就職支援室の一画を間仕切りで区切られた一画で行われている。基本的には前日までに相談者が就職支援室を訪れるかもしくは連絡を行い、模擬面接・相談の予約を入れるというシステムになっており、相談者の人数に合わせて時間が割り当てられる。そして、その模擬面接・相談は面接官と相談者が一対一で向かい合って座り行われる。撮影は固定カメラ一台で行い、MDによる音声の録音も行った。2004年7月22日（木曜日）の女性面接官の模擬面接・相談では、出入り口から向かって右側の席に面接官、向かって左の席に相談者が着席し、2004年7月27日（火曜日）の男性面接官の模擬面接・相談では反対に、面接官が出入り口から向かって左側の席に、相談者が右側の席に着席していた。（次ページの配置図を参照）



【図1：模擬面接・相談部屋の配置図】

1-2. データの概要

2004年7月22日（木曜日・女性面接官担当）には男性相談者が二人訪れており、各々一時間程模擬面接・相談を行っている。2004年7月27日（火曜日・男性面接官担当）には四人の女性相談者が訪れており¹、各々30分程の模擬面接・相談を行っている。

下の表1は、相談者各々の模擬面接・相談の内容と所用時間をまとめたものである。

【表1：模擬面接・相談内容と所用時間】

2004年7月22日（木曜日・女性面接官担当）		
	内容	所用時間
①男性相談者A （データⅠ）	何度か企業の面接を受けているが内定をもらえない。自分のこういったところに非があるのかを相談。	1時間程度
②男性相談者B （データⅡ）	近日中に行われるの企業面接に備え、模擬面接を受けに来た。初めての面接ということもあって、面接を受ける部屋への入り方、座り方から指導。面接中に面接官の携帯電話が鳴り出す。	1時間程度

¹ 当日、四人の女性相談者が訪れているが、撮影・録音を行ったのは三人の女性相談者のみである。

2004年7月27日（火曜日・男性面接官担当）		
	内容	所用時間
③女性相談者A (データⅢ)	翌日の公務員面接に備え面接を受けに来た。	30分程度
④女性相談者B (データⅣ)	近日中に行われる企業面接に備え面接を受けに来た。「何も心配要らない。あなたなら大丈夫。」と励ます。終了する少し前に相談者が泣き出す場面が見られた。	30分程度
⑤女性相談者C (データⅤ)	公務員面接について相談。途中から身の上相談のようになり、相談者が泣き出す場面が見られた。	30分程度

2. 制度的場面としての就職支援室に関する考察

ここでは、会話の終了部分に焦点をあて、分析・考察を加えていく。

X大学の就職支援室でも行われている模擬面接・相談場面は、一般的に、相談者が面接官（あるいは助言者）が助言を受ける場であると考えられる。また、時間制限もあり、限られた時間の中で面接官と相談者がやり取りを行い、相談者が的確な助言を受ける場である。私たちが、日常で家族や友達と会話をする場面とは異なり、ある種制度的な場面であると言えるのではないだろうか。

データを分析するにあたって、会話の終了の部分について述べられた文献から引用したい。

もし移行適切性²は何処で解除することができるかと言う問題が系統立ったものであるならば、隣接対偶がこの問題を解決することになるだろうというのがそれである。というのも、移行適切性が解除されるのは、第二対偶成分が生起した後だからである。つまり次のとおりである。最終交換〔〈「さよなら」－「さよなら」〉〕の第一対偶成分が生起するならば、そのことにより、その成分の話し手がいま会話を終了したいと提案していることが明らかになる。それに対し、第二対偶成分が生起するならば、その会話の終了の意図が読み取られ同意されたことが明らかになる、というわけである。ところで、このような解決法は制度化されたものである。そこでいまや、この解決方法が用いられているとはっきり言える場合が、どの範囲にわたっているのかが明らかとなる。たとえば、相手に返答する余地を与えないような仕方で「さよなら」を言う場合と、相手が返答をする余地を残すような仕方で「さよなら」を言う場合とでは、ぜんぜん違う。最初の場合、後者の場合と対照的に、その振る舞いは際立ったもの

² 「次の話し手への移行が適切になされる」こと。(Schegloff and Sacks 1973=1989:181)

となる。つまり、怒りを表していたり、無愛想を示していたりすることになる。また、怒りを表したり、無愛想に振舞うために、あえて前者のようにすることもできよう。このようにどちらの場合を選ぶかによって異なる結果が生じるということこそ、右の解決方法が制度化されていることの証拠である。最終交換は決して個人的な選択にかかわる問題ではない。(Schegloff and Sacks 1973=1989:189-190)

ここでは、「会話の終了が自然に生じるものではなく、達成されるものであるということ、隣接対が互いの理解の表示と確認のために利用可能であることが」述べられている(岡田 1996:166)。就職支援室において、模擬面接・相談場面の終了がどのように達成されているのかを、データを取り上げ検討していきたい。

まず、データ I の【断片①】を取り上げる。

【断片①】(2004. 7. 22 2:01:26~2:04:24 PM)

- 1 R : まああの: 具体的なまた内容も少し付け加えながら: 説得力を増す
2 E : はい
3 R : ここはやっぱり気に (2) あの: : ポイントだと思いますので
4 E : はい
5 R : そこをちょっと考え: て
6 E : はい
7 R : え: : 次の
8 E : はい
9 R : 面接に: (1) 臨まれたらいいんじゃないかな (.) と[思います
10 E : [はい
11 R : じゃあちょっと時間が (.) 多分[(.) きてると思うんですけども
12 E : [hh はい
13 R : いいですか
14 E : はいありがとうございます
15 R : あと何か質問があればよろしいですか
16 E : はい
17 R : またあの: : (.) やってみてそれで (1) どうも上手くいかないということで
あれば (.) また (.) 時間があればね
18 E : はい
19 R : 来ていただいたら:
20 E : はい
21 R : いいと思いますので

- 2 2 E : はい
- 2 3 R : まあとにかくでも (.) この時期になってくると : いくつもの (1) まあ面接受けてだめだったっていう : 経験があったりするとちょっと (.) 気持ち的にモチベーションをあげていくってのがなかなか
- 2 4 E : ん ; ; はい
(52 行程省略)
- 7 7 R : 頑張ってくださいということで
- 7 8 E : はい
- 7 9 R : はい
- 8 0 E : ありがとうございます
- 8 1 R : はいじゃあいいですか
- 8 2 E : はい
- 8 3 R : じゃあはいお疲れ様です
- 8 4 E : hh ありがとうございます
- 8 5 R : 《撮影者の方へ顔を向け》(2) よろしいですか



【画像 1 : 面接官が撮影者の方へ顔を向けている場面】

この模擬面接・相談で男性相談者に割り当てられている時間は一時間程度で、この後には次の相談者の模擬面接・相談が行われる。この場面は、面接官の 1 1 R 「じゃあちょっと時間が～」という、時間的制約があり終了しなければならない旨の発話がなされ、そのことを相談者に確認するように 1 3 R 「いいですか」と発話している。それに対して相談者は 1 4 E 「はいありがとうございます」と答えて、互いにこの場を終了させようとしていることが見てとれるが、ここでは終了していない。続けて面接官の 2 3 R 「まあとにかくでも～」という発話で別の話題が提起され、しばらく会話が続けている。そして、8 3

R-84Eの挨拶の交換がなされ模擬面接・相談は終了した。またここでは、83R-84Eで終了する前に、81R「はいじゃあいいですか」-82E「はい」という終了することの確認とそれに対する返答が見られ、確実にこの場を終了させようとしていると思われる。加えて84Eの相談者の発話の直後に、面接官は撮影者の方に顔を向け（【画像1】を参照。画像中の矢印は視線を表している）、85R「よろしいですか」と発話している。これまで話していた相手から顔を背け、この模擬面接・相談場面の別のもう一人の参加者の（つまり撮影者の）方に向き話しかけるといふことで、この場はもう確実に終了したといふことが相談者にも明確に示されている振る舞いであるといえるのではないだろうか。

次に、データⅡの【断片②】を取り上げる。

【断片②】（2004. 7. 22 3:09:34~3:10:15 PM）

- 1 R : まあじゃあとりあえずは：
2 E : はい
3 R : あの今日は面接のことだったので
4 E : はい
5 R : え：っとポイントは：（.）多分わかっていたか：って[思いますので：
6 E : [はい
はい
7 R : で：え：少しこの辺の（.）具体例なんかも付け加えてみて
8 E : はい
9 R : んで月曜日
10 E : はい
11 R : うん（.）頑張ってきてください
12 E : はいわかりました
13 R : いい結果を待ってますので[hhhh
14 E : [はい
15 R : （1）学校推薦で[：はい
16 E : [はい
17 R : じゃああとはいいいですか
18 E : はいありがとうございます
19 R : はい
20 E : はい
21 R : じゃあこれで終わらせていただきます（.）ごめんなさいね何回も携帯電話（.）
[かかってきて
22 E : [あっ いえいえ

- 23 R : 大変失礼をいたしました
 24 E : いい勉強になりました
 25 R : はい
 26 E : ありがとうございます 《おじぎをする》
 27 R : はい 《おじぎをする》 どうも 《撮影者の方にむき軽くおじぎをする》

ここでは、一行目の1 R「まじゃあとりあえずは：」という面接官の、終了を予期させる発話がみてとれる。その次の2 Eの「はい」という相談者の発話から、面接の終了の予期が明示されそのことを理解していると考えられる。その後、この面接をまとめるような総括の発話がなされている。そして17 R・18 Eでここで会話が終了してもおかしくないような話題交換終了（「いいかい？」－「いいよ」というような）、「じゃああとはいいですか」「はいありがとうございます」という発話が見受けられるが、ここでは終了せずに、「はい」「はい」という発話が続き、念をおすように21 Rで「じゃあこれで終わらせていただきます」と、終了することを明確に示した発話がなされている。しかし、面接官が続けて「ごめんなさいね～」とこれまでと異なる話題を提供したことから、まだ発話は続き、26 E・27 Rの「ありがとうございます」「はいどうも」という発話でようやく面接は終了した。

続いて、データIVの【断片③】を見ていく。

【断片③】（2004. 7. 27 3:02:56～3:04:35 PM）

（32 行程省略）

- 33 R : もっとこう（.）心理的な圧迫感あるからね：
 34 E : 《nod nod》《右手側の鞆にハンカチをしまい、鞆を持ち上げる》
 35 R : はい（.）ほな頑張ってくださいね
 36 E : はい《体を左に向け立ち上がる》
 37 R : はいどうもありがとうございました
 38 E : 《面接官の方を向き》ありがとうございました hhh
 39 R : はあやいうて大きなため息がでてきよる hh
 40 E : hhh 失礼しました

【断片③】については次節で詳しく述べるのだが、ここでは終了の部分だけを取り上げる。この場面では、相談者が34 Eでの振る舞いが終了の契機となっていることが見てとれる。33 Rの面接官の助言に対して相談者は頷き、ハンカチを鞆にしまいその鞆を持ち

上げるといったこの部屋から退室することが伺える振る舞いをしている。それを見た面接官は、「はいほな頑張ってくださいね」と発話し、続けて「ありがとうございました」－「ありがとうございました」と挨拶の交換がなされ模擬面接・相談の場は終了した。

最後に、データⅢの【断片④】とデータⅤの【断片⑤】を見ていく。

【断片④】（2004. 7. 27 2:28:11～2:28:16 PM）

1 R : じゃあもう無いようやったらこれで終わりにしましょう

2 E : はい

3 R : はい

4 E : はい[ありがとうございました]

5 R : [頑張ってくださいね
吉報をお待ちしていますよ]

6 E : はい

7 R : は : い

【断片⑤】（2004. 7. 27 3:44:18～3:44: PM）

1 R : またおいで : ほな

2 E : あ

3 R : はい

4 E : はいありがとうございました

5 R : はいどうもどうも

6 E : ありがとうございます[ました]

7 R : [は : い どう : も :

8 E : 《手元の資料を右手側においてある鞆にしまい、椅子から立ち上がりながら》
頑張ってきます

9 R : は : : い

10 E : ありがとうございました

11 R : は : : い

【断片④】では1 R 「じゃあもう無いようやったらこれで終わりにしましょう」－2 E 「はい」、【断片⑤】では1 R 「またおいで : ほな」－4 E 「はいありがとうございました」という発話が見られ、いずれも、この場を終了することを示し確認する面接官の発話と、それに対する相談者の発話になっている。その後「ありがとうございました」という発話が、とくに【断片⑦】においては何度も繰り返され、模擬面接・相談の場は終了した。

データの総てにおいて、「はい」－「はい」、「ありがとうございます」－「どうも」、「ありがとうございました」－「ありがとうございました」といった挨拶の交換が繰り返してなされている。そしてこの挨拶が最終発話となりその場が終了していることから、これらの挨拶の交換は就職支援室における模擬面接・相談場面での慣習的な最終交換であると考えられる。また、この繰り返し行われる交換は、会話の終了がいかに危険を含んでいるかを表しているように思われる。ここで面接を終了すれば次の機会が期待できない、本当にここで終了してしまっても大丈夫だろうかという危機・不安に対する慎重さが、繰り返され交換される挨拶により、なかなか会話が終了しないことに表れているのではないだろうか。

3. 分析・考察

ここでは、【断片③】を取り上げ、分析・考察を加える。以下のデータ【断片③】において特徴的な場面は、二度見られる終了と、相談女性者が泣き出す場面である。一度目の「ありがとうございました」－「は：：い」という挨拶を交換した後、相談者が泣き出し、しばらく会話が続いた後二度目の「ありがとうございました」－「ありがとうございました」という交換がなされ、模擬面接・相談は終了した。

【断片③】(2004. 7. 27 3:02:56~3:04:35 PM)

- 1 R : 表情だ(.)君の場合は
2 E : そうですね《大きく頷きながら》
3 R : う：：ん(.)硬い
4 E : はい
5 R : (5) 笑顔の作り方教えてあげようか
6 E : (2) はい
7 R : (2) ここ《眉間を指差し》のね
8 E : 《眉間を触る》
9 R : (.) 眉のどこ(1) 眉間ちゅうんやけどここを広げるように(2) 努力したらいい(3) ここ《眉間を触り》へ(.) ここへ意識
10 E : 《眉間を触る》
11 R : 集中してね(.) これ広げるようにしたら(.) にやっとう笑ってるように見える
12 E : はあ：：=
13 R : =口元少：しこうね(2) 緩めたら(1) は[hhhhh

- 14 E : [hh はい (1) ありがとうございました《お辞儀をしながら》
- 15 R : は : : い
- 16 E : はあ : 《大きくため息をつく》 =
- 17 R : = はあ : (2) がんばれ
- 18 E : 《手で目を押さえる》
- 19 R : 明後日 : かな
- 20 E : わ : だ : : れがですね
- 21 R : えああ↑
- 22 E : いや : : : はい《右手側にある鞆に荷物をしまう》
- 23 R : 泣いたらあかんで
- 24 E : はい《鞆からハンカチを取り出す》
- 25 R : ふ hh
- 26 E : 《ハンカチで目を押さえ鼻をすする》
- 27 R : (3) やっぱこんな《撮影しているカメラを指差し》 あったら緊張するか
- 28 E : 《カメラの方を向き》ん : ちょっと h
- 29 R : (2) そやけど (1) 本ちゃんの面接の時すら : : っと並ぶからね
- 30 E : 《nod nod》
- 31 R : こんな一対一の面接やないですよ
- 32 E : 《nod nod》
- 33 R : もっとこう (.) 心理的な圧迫感あるからね :
- 34 E : 《nod nod》《右手側の鞆にハンカチをしまい、鞆を持ち上げる》
- 35 R : はい (.) ほな頑張ってくださいね
- 36 E : はい《体を左に向け立ち上がる》
- 37 R : はいどうもありがとうございました
- 38 E : 《面接官の方を向き》ありがとうございました hhh

このデータから、就職支援室における模擬面接・相談の場面では、二つの課題が存在することが考えられる。二つの課題というのは、①相談者を本番の面接で合格させるための助言をしたり、そのスキルを身につけさせるといった、「教育的相談の課題」と②助言を求めに来た相談者を慰めたり満足させたりといった「心理的相談の課題」である。データを見ながら分析していく。

3-1. 一度目の終了の挨拶交換

【断片③】の14 E・15 Rが一度目の終了の挨拶の交換が行われたと思われる

る部分であるが、その後すぐに女性相談者の16E「はあ：」という発話が見られ、続けて面接官と相談者の会話がなされている。ここで終了がなされずに会話が続けられた場面において注目すべき点は、面接官の15R「は：：い」と相談者の16E「はあ」という発話である。15Rで面接官は「は：：い」という延長した発話をしている。この延長は、面接官が相談者をモニターしていることを表していると考えられる。今やろうとしていること、この場面で言えば模擬面接・相談を終了することを進めても良いかと言ったときに、そのことに対する相手の表情や態度等を確認すること、すなわちモニターすることが必要であり、自然なことであると考えられる。加えて、15Rの面接官の発話の際に視線が相談者の方へ向いている（【画像2】を参照）ことから、このとき面接官は相談者をモニターしており、模擬面接・相談を終了させようとしていたことが伺える。しかし、この時点では模擬面接・相談は終了されなかった。それは、相談者の16E「はあ」という発話が続けられているからだ。



【画像2：面接官が相談者をモニターしている場面】

この「はあ」という発話は、20E「わ：だ：：れがですね」という相談者の発話を受けて、ため息であると考えられる。20Eの発話は、面接官の19R「《企業面接は》明後日：かな」という発話に対する返答であるが、続いての面接官の21R「えああ」という聞き返しの発話からも考えられるように、相手に意思が伝わっておらず曖昧な返答になっている。この曖昧な返答は、19Rの面接官の問いかけによって導き出されている。このことから20Eの発話は、本番の企業面接に対する自信の無さや自分が準備不足であること、またその状況を受け入れられないことの表れであると考えられ、16E「はあ」はため息であると考えられる。また、ここで終了せずに発話を続けることで、相談者にとって課題が達成

されていないという不充足感が表れていると思われる。しかしここで重要なのは、この「はあ」がため息であるかどうかということではなく、面接官がその様に理解したかどうかであるが、上記のようにこの時点で会話が終了していないことから、少なくとも面接官にはこの終了を終わらせるのには不適當である理解されていることは明らかである。そして、続いて発話がなされている。

3-2. 二つの課題

この後面接官の17R「がんばれ」という発話の後18Eで相談者が泣き出すという場面が見られる。そして、泣き止まないまま面接は終了した³。ここで、相談者が泣き出したことにより、17Rの「がんばれ」が、この場面において「心理的相談の課題」がレリバントであるという合図(Cue)になってしまっていることが考えられる。13行目あたりまで、表情の作り方等「教育的相談の課題」のサポートを面接官は行ってきたが、16E~20Eで相談者はそれまでの課題達成の不充足感を表示している。これは、14E「はいありがとうございました」という、これまでの面接官が行ってきた「教育的相談の課題」のサポートに対する理解と了解の意を含む発話から、「教育的相談の課題」ではなく、「心理的相談の課題」の不充足感を表示しそのサポートを要求していると考えられる。そしてそれに対しての面接官の17R「がんばれ」という発話で、この場面において「心理的相談の課題」がレリバントになっている。またこのことは、「教育的相談の課題」のサポートではこの場が終了がなされなかったため、「心理的相談の課題」のサポートへと移行した、ある種、面接官が模擬面接・相談を終了させようとするテクニックの一部であると言えるかもしれない。

続いて30行目以降、相談者は面接官の発話に対して、泣きながら頷く(《nod》)という場面が何度も見られる。この頷きは面接官に対する返答をパスしていると考えられるのではないだろうか。泣いていて返事ができず頷くという、この「泣く」と言う行為は、この場面において、答えないことを決定的な規範として要求されずにすむという働きをしている。「泣く」ことで返答をパスしているということは、相談者は面接官の発話に対して同意もしていないし、不同意もしていない。Pomerantz (1984)によると、一般に「意見を述べられること」に対する振る舞いとして、「不同意」よりも「同意」が優先され、同様に「助言」に対しても「拒絶」より「受諾」が好まれると述べられている。このことから相談者は面接官のサポートに対して「やわらかい抵抗⁴」をしているのではないかと思われる。

³ 泣いたまま模擬面接・相談場面が終了したことを不思議に感じる方もいるかもしれないが、撮影当日、相談に訪れた四人の女性相談者のうち二人に同様のことが見られたことから、それほどイレギュラーなことではないと感じた。

⁴ これは筆者の造語である。相談者はこの場面での面接官の立場を考慮し、表立ったかたちでは助言を拒絶しないが、受諾もしていない。且つ、面接官は相談者の泣きながらの頷き

23R・24Eの発話を見てみる。「泣いたらあかんで」という面接官の発話から、この場面では「心理的相談の課題」をレリバントにしないという宣言と同時に、この発話自信が、模擬面接・相談の場面においてレリバントな課題は「教育的相談の課題」であることを表していると考えられる。そしてその宣言に対して相談者は「はい」と答えている形になっている。ここでのレリバントな課題は「教育的相談の課題」であるけれども、相談者は、16E～20Eで示された「心理的相談の課題」の不充足感を、「拒絶」でも「受諾」でもない、しかし相談場面が終了に向かうことを邪魔しない形である、泣きながら頷くことで表示し続けており、このとは表立った形で表されないけれども「やわらかい抵抗」をしていると言えるのではないだろうか。

ここまで、「相談者はこの場面での面接官の立場を考慮し、表立ったかたちでは助言を拒絶しないが、受諾もしていない。且つ、面接官は相談者の泣きながらの頷きを抵抗しているとは理解していない」という意味で「やわらかい抵抗」と言う風に述べてきたが、その後相談が終了されるまで相談者は、「心理的相談の課題」の不充足感をかたくなに表示し続けている。そして先にも述べたように、相談者の曖昧な返答を導き出したのは面接官の問いかけであり、そのことが相談者の不充足感を表示し続けるきっかけとなっている。このことから、「やわらかい抵抗」は「何がその場面においてレリバントであるかを相手に立ち上げさせた抵抗」でもあると言える。この意味で相談者はかたくなに、そして明白に「心理的相談の課題」を表示し続けているが、「相談者はこの場面での面接官の立場を考慮し、表立ったかたちでは助言を拒絶しないが、受諾もしていない。且つ、面接官は相談者の泣きながらの頷きを抵抗しているとは理解していない」という意味での「やわらかい抵抗」の特性からそのことが表立っては面接官に対して表示されておらず、またこの場面でのレリバントな課題は「教育的相談の課題」であると面接官は表示していることから、相談者は気をつけて不充足感を表示しないようにし、また面接官はそのことに触れないようにしているといえ、結果的に模擬面接・相談場面が終了に向かったのではないだろうか。

4. まとめ

3節では、模擬面接・相談の場では「教育的相談の課題」と「心理的相談の課題」の二つの課題が存在していること、そしてその文脈から、その場面において何がレリバントになっているかを述べた。そのことで、二つの課題のうち、「心理的相談の課題」の不充足感が残されたままではあるけれども、もう一つの「教育的相談の課題」が解決されて模擬面接・相談の場は終了へと向かった。また終了に向かうために、相談者は不満を持ちそのことを明白に表示しつつも表立って表示さ

を抵抗しているとは理解していないということから、抵抗することよりも「やわらかい抵抗」と言えると考えられる。

れおらず、終了を邪魔しないように泣きながら頷き返事をパスしていた。そして面接官は「心理的相談の課題」に触れないようにすることでその場を終了に向かわせようとしていた。一般的に就職相談等の場面という、面接官が一方的に相談者に対して助言を行い相談者はそれを受け入れその場が終了するというように思いがちであるが、そうではなくお互いが終了の達成を目指し気遣い、お互いが終了を作り上げていることが以上のことから見て取れた。これらのことが、模擬面接・相談場面に見られる特徴であり、模擬面接・相談の場を模擬面接・相談の場として成り立たせているといえるのではないだろうか。

主な参考文献

- 秋葉昌樹、1995、「保健室における「相談のエスノメソドロジ的研究」『教育社会学研究』57：163 - 181。
- 安藤清志、1994、「見せる自分／見せない自分—自己呈示の心理学—」サイエンス社。
- 串田秀也、1999、「助け舟とお節介—会話における参与とカテゴリー化に関する一考察」好井裕明、山田富秋、西坂仰編『会話分析への招待』世界思想社 124 - 147。
- 、2001、「私は—私は連鎖：経験の『分かちあい』と共—成員性の可視性」『社会学評論』52 (2)：214 - 231
- 中村和生、樫田美雄、2004、「〈助言者〉—〈相談者〉という装置」『社会学評論』55 (2)：80 - 90。
- 岡田光弘、1996、「『制度』の研究をすること—インタビューと 119 番通話の終了部の会話分析—」『現代社会理論研究』6：165 - 180。
- Pomerantz, Anita, 1984, "agreeing and Disagreeing with Assessments: Some Features of Preferred Dispreferred Turn Shapes," Atkinson, John and John Heritage eds., *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, Cambridge University Press, 57-101.
- Schegloff, Emanuel A. and Sacks, Harvey, 1973, "Opening up Closings" *Semiotica*. (=1989、北澤祐・西坂仰訳『日常性の解剖学—知と会話—』マルジュ社。)
- 好井裕明、山田富秋、西坂仰編、1999、『会話分析への招待』世界思想社。

◎トランスクリプトで用いた記号

- | | |
|---------------------------------|----------------------------------|
| R：助言者である面接官 (adviser の r) | E：相談者である学生 (advisee の e) |
| [：発話が同時に開始された位置
(数字)：発話のない秒数 | =：行末から行頭への切れ目のないつながり
：直前の音延ばし |
| 〈nod〉：頷き | 《 》：補足説明 |